

連載 第33回 福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

戦後復興から現代へ

4、常円寺本堂再建へ その一

『豪華モダンな殿堂 新宿常円寺も落慶式』副都心として急激にぼう張高層化する新宿(西口)駅に近い常円寺(及川真学住職)東京都新宿区柏木一の一〇九)では、このほど環境にふさわしく、およそ八千万円の巨費を投じ鉄筋コンクリートのモダンな殿堂を完成、さる十月三十日午後一時から金子日威池上本門寺貫首(管長代理)ならびに久保田正文立正大学副学長らおよそ一千名が出席、開堂入仏の大式典をにぎやかに繰り展げた。

新殿堂は間口九間、奥行十五間だが、二階建て、一階には会議室、納骨堂、準備室、二階が本堂になっている。特に印象的なのは、日輪と蓮華をかたどった純アルミリリーフ、それに巨大な「日蓮聖人一代記壁画」だ。ご宝前のシヤッターを閉めてしまえば、高級な集会場ともなり、常時講演会、音楽会、映画会などができる設備がととのっている。

「建築にあたり考えたことは、檀家の方々が活用しやすいようにすることと、地域全体の教育文化のためにお役に立ちたいということでした。幸い檀信徒の強い協力をうけることができ…」

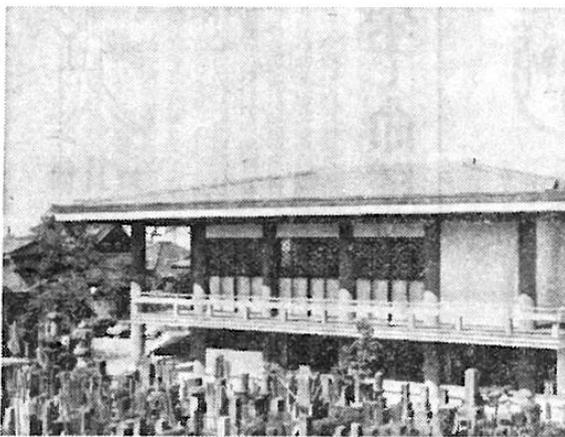
と住職は説明してくれたが、予想通り落慶後は地域の人々が連日活用するようになったという。なお、常円寺は、昭和二十年五月の大空襲で全焼、昭和二十六年に庫裡を、そしてこのほど本堂を完成させたものである。

昭和四十一年(一九六六)十月三十日、常円寺本堂の落慶式が行われた。右はその模様を伝える『日蓮宗新聞』の記事である。その落慶式には当時の池上本門寺の貫首(以下、立正大学副学長をはじめ一千人もの参列があつたという。内・外装ともに現在とほとんど変わらないこの本堂は「モダンな殿堂」として、当時としては新しい姿の建物であつたようである。

『日蓮宗新聞』の昭和41年11月20日号に掲載された「常円寺本堂落慶式」の記事

豪華モダンな殿堂

新宿常円寺も落慶式



総工費八千万円をかけて完成した豪華モダンな殿堂を完成、さる十月三十日午後一時から、金子日威池上本門寺貫首(管長代理)ならびに久保田正文立正大学副学長らおよそ一千名が出席、開堂入仏の大式典をにぎやかに繰り展げた。

副都心として急激にぼう張高層化する新宿(西口)駅に近い常円寺(及川真学住職)東京都新宿区一〇九)では、このほどおよそ八千万円の巨費を投じ鉄筋コンクリートのモダンな殿堂を完成、さる十月三十日午後一時から、金子日威池上本門寺貫首(管長代理)ならびに久保田正文立正大学副学長らおよそ一千名が出席、開堂入仏の大式典をにぎやかに繰り展げた。

戦後復興の第一として本堂再建は掲げられたが、諸事情により停滞を余儀なくされた。その結果、庫裡再建を第一とする方針に転換されたことはすでに述べたが、再び計画が立ち上げられたのは、総代会の議事録によると、昭和三十三年(一九五七)二月、総代世話人会の時のようである。

このとき本堂再建が再び議題としてとりあげられ、その際、「長期の計画をもって鉄筋建ての不燃焼のものがよいという意見が多数」を占めたという。終戦直後は、まず本堂をという意向であつたが、この三十二年の時点では、「長期の計画をもって」とあるように、じっくりと時間をかけてその計画を進めていくという総

意がうかがえる。また、「鉄筋建ての不燃焼」という意見が注目される。これは戦災で焼失したという経験が背景にあつたのだろうが、これから「副都心として急激にぼう張高層化する新宿」を先読みしたともいえよう。いずれにしろ、こうした基本方針のもとに、住職、総代会の役員一同が、この近年に復興した他の寺院のいくつかを参考のため見学に行くこととするのでこのとき議決したという。

その後、本堂再建をめぐって時間をかけて意見交換がなされていたものと考えられるが、それから二年後の昭和三十六年(一九六一)七月一日の定期総代会において、工事設計を東京工業大学教授の勝田千利氏に依頼することが決定する。勝田教授は当山の檀徒である。そして、さらにその二年後の昭和三十八年(一九六三)十月、勝田教授による設計図が完成する。(同年十月十九日総代会)

このときの総代会では、この設計図をもとに住職より建築時期や費用の見積もりなどについて提案されたが、本堂の外廊、基礎等に充分な費用をかけ、本堂内部の整備や荘厳は第二期にかけてもよいという意見が大勢を占めたという。こうした意見をもとに、地下に納骨堂を備えた鉄筋コンクリート一階建ての本堂の昭和四十一年九月完成を目指すという具体案が作成され、同年十二月六日の役員会で承認され、翌年正月に檀信徒に向けて計画の概要が発信された。いよいよ悲願の本堂再建が具体的に動き出すのである。(つづく)